



ドキドキ。いよいよ、本番らしいおん組



紙芝居に見入るぞう組



「はい、どうぞ」「よかったね」やり取りしたことを台詞にする



「怒っているようで上手いね」つりあがった眉の表現に気付く



ボードに話し合いの内容を書き出す。題名や登場人物が決まる



みんなで話し合い「ぞう組さん、お話聞くことが好きだよね」

CASE 33 5歳児



「紙芝居を」読んであげたいね

協力園 玖珠町 杉ノ子こども園

（幼児の実態）
3学期になって郵便ごっこを楽しんだ5歳児らしいおん組の子どもたち。保育者が準備したはがきに絵や文字を書いてクラスや年下の友達、先生たちへ届けました。代わる代わる郵便配達員になってはがきを配る郵便ごっこは、自分達も楽しみ、「お手紙もらって嬉しい」「ありがとう」と年下の友達からもとても喜ばれました。年下の友達との関わりで楽しさを感じたらしいおん組のみんなは、「杉ノ子こども園とあと少しでお別れだね。ぞう組さん（4歳児）にまた何かしてあげたいね」と、思い出に残る遊びを自分たちで考えています。

「どんなことをしたら喜んでもらえるかな？」らしいおん組で話し合いが始まりました。A児は、小さい友達は話を聞くのが好きなことを話しました。B児は、年上のお兄さんお姉さんが絵を描いてくれたこと、格好よく紙芝居を読んでくれたこと、憧れの気持ちを持ったことを友達に伝えました。「そうだったね。お話、楽しかったね」と共感する友達も出てきて「自分たちもお話を作り、お兄さん、お姉さんらしく紙芝居を読んであげたいね」とみんなの気持ちがまとまりました。
「どんなお話にする？」まず、紙芝居のストーリーを話し合いました。「ぞう組が知らない私たちのことをお話にする？」「ドキドキしたことを入れようよ」とぞう組が喜びそうな話が出されました。担任が、ボードを手元において出された考えを整理する中、題名は「すぎのこどもえんのおともだち」、登場人物はらしいおん組の自分たち、ぞう組が知らない自分たちの話や、ドキドキしたことを紙芝居にすることにまとまりました。
A児は「ぞう組さんの二人がスコップの取り合いをしていてドキドキした」、B児も「自分が先に見つけた」と取り合いがなかなか終わらなかったよ」と、ハラハラしたことを伝え、ドキドキしたことはスコップの取り合いの場面を書くことになりました。話し合う中で、仲直りの方法を考えていたららしいおん組に担任が、「同じスコップを探してあげるのどうかな？」と声をかけていたこと、同じ物を見つけて渡すと仲直りができて最後はみんなで大きなお山づくりをしたことも思い出しました。仲直りを最後の場面にして一人が1枚を分担して8枚の紙芝居を作ることになりました。
絵を描く時には、スコップの取り合いの場面で眉毛を大きくつり上げて描いた友達に「怒っているようで上手いね」、「Yちゃんの髪の毛は長いよ。絵も長くしたらYちゃんに似てくるんじゃない？」など気付いたことを伝え合う姿が見られました。様子を見ていた担任が「本当だね。Yちゃんの髪、長いもんね！」と、子ども同士の気付きや伝え合いを褒めると、子どもたちは嬉しそうにしています。
台詞は、その場面でのやり取りをみんなで思い出して言葉にすることにしました。担任は、やり取りをボードに書いておきました。その後、子どもたちは、ボードやひらがな表を見たり、友達と教え合ったりして台詞を自分が描いた絵の裏に書きました。台詞も決まり、一人一人が読み始めると「ぞう組さんは、ゆっくり読んであげた方がお話が分かると思うよ」と友達の一人から声が上がります。まずは、ゆっくり読むことから始めました。
B児は、「大きくなったら保育士さんになりたい」という夢を持っています。普段から年下の友達に「先生みたいに優しくしたい」という思いで接しています。紙芝居も「先生みたいに読みたい」とはりきっています。『僕が先に見つけた』『ちがう わたし！』のところで、先生みたいに読めないんだよね」と元気がありません。聞いていた友達が「怒ってるみたいで強くなるよ。けんかしてるつもりで読んだら」と声をかけると「うん、やってみる」と読み始めました。他の友達も、ぞう組に行く日まで何回も読んで、友達の話を楽しんでいました。
さて、いよいよ本番の日です。らしいおん組のみんなは「ドキドキするなあ」と言いながらも楽しみいっぱい面の持ちこたえてぞう組へ入ります。それから緊張しながらも自分たちで作った紙芝居を読んで聞かせました。ぞう組の子どもたちは、紙芝居の絵とお話に聞き入っています。中腰で見ている友達もいます。終わると「絵がかわいい」「おもしろかった」と言いながら、ぞう組の担任と一緒に拍手をしました。B児も「けんからしく言えた」と嬉しそうです。ぞう組が喜ぶ様子を見たららしいおん組は、「喜んでもらってよかった」「嬉しい」と笑顔いっぱいです。
ぞう組に喜んでもらったらしいおん組は、自信をもち、表現する楽しさを味わったようです。「先生、もっと小さい友達やおうちの人も聞いてもらいたいね」と、自分たちの紙芝居を発表したい気持ちを膨らませています。

協同性・言葉の伝え合い
保育者の援助・環境構成のポイント
・心を通わせる異学年の遊びの場の設定
・保育者の環境構成や援助
共感的な態度や言葉で関わり、自分の思いや考えを自由に表現できる雰囲気作り。話を整理したり、共有したりする機会を設定。
・同じ目的の実現に向かう友達の存在
どんなストーリーや台詞にするか話し合ったり、絵の描き方や台詞の言い方を工夫し合ったりして、ぞう組が喜ぶ紙芝居を作ろうとする友達の存在。

事例から見られる10の姿の育ち
言葉の伝え合い
子どもたちは、言葉のやり取りを通して、相手の話を聞いて理解したり、共感したりして言葉による伝え合いができるようになっていく。紙芝居作りでは、一人の子の経験や思いを伝える言葉をきっかけに、周りの子どもも同意したり、付け足したりして会話を重ね、友達や先生と言葉の伝え合いを楽しみながらストーリーや台詞を作る姿が見られる。
また、眉を吊り上げて絵を描いた友達に「怒っているみたいでうまい」と気付きを言葉で伝えることで、言われた友達も嬉しくなったと思われる。
紙芝居を作る中、相手に分かるように工夫して言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いて理解したりして言葉の伝え合いを楽しみ、先生や友達と心を通い合わせる5歳児の姿が見られる。

事例から見られる10の姿の育ち
協同性
卒園間近のらしいおん組は、これまでの交流からぞう組を喜ばせたいと共通の目的をもつ。そして、ぞう組の気持ちや自分たちの経験を語る中から紙芝居を喜んであげたいと思いが共有される。
「ぞう組が喜ぶ紙芝居」の実現に向けて「どんなお話にするか」「ぞう組の立場になってみんなでストーリーを考えている。また、髪の毛は長くしたら」「けんかしてるつもりで」など、幼児同士で絵の描き方や台詞の言い回しを工夫しながら協力する姿が見られる。
ぞう組に紙芝居を喜んでもらったらしいおん組は、表現の楽しさ、やり遂げた充実感を十分味わうことができたと思われる。その喜びが「もっとしたい」と次の発表の意欲を高めている。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」
自立心 協同性 言葉による伝え合い
社会生活との関わり 豊かな感性と表現
友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりして、充実感をもってやり遂げるようになる。